

特

集

情報化社会における 授業づくり

情報化が進み、先が見通しにくい社会で、国語の授業に求められる視点とはどんなことでしょうか。

中川一史先生(放送大学教授と、五年「想像力のスイッチを入れよう」の筆者・下村健一さん(ジャーナリスト)のお話を通して考えます。

撮影・鈴木俊介

提

言

主体的・協働的に情報を扱う

放送大学教授 中川一史^{なかがわひとし}

情報の理解・表現と メディア・リテラシー

社会の情報化・グローバル化が進展し、先を見通しにくくなっているこの時代。そこに生きるために必要となる資質・能力を育むため、今、主体的・協働的に課題を解決していく学習のあり方(「アクティブ・ラーニング」)が求められています。なかでも国語では、その課題解決の過程で、目的に応じて、必要な情報をいかに効率的に収集し、的確に加工・整理し、効果的に表現していくかが大事になってきます。ただ、あふれる情報の中で、自分に必要な情報を見極めることは、たやすいことではありません。

そこで、私が提案したいのは、次の二つの視点です。これらを主体的・協働的に学んでいくことが肝要だと考えます。

① 情報やメディアの特性を踏まえた理解・表現の活動

② メディア・リテラシー

言語活動で自ら経験

とりわけ、①に関していうと、これまで国語では、ひと続きの文章を理解・表現することに重きが置かれる傾向があったように思います。しかし今や、課題解決の過程で対象とすべき情報はそれにとどまらず、絵・写真・図・グラフなど多岐にわたります。これまで授業で大きく取り扱われることが少なかった、文章以外のこうした情報の理解・表現について、これからの国語の授業では、いっそう積極的に学習していく必要があるといえます。

今回は、そうした視点から、教科書に位置づけられている学習の場についてご紹介していきます。

①・②を意識するときにまず考えたいのは、情報を収集・選択し、自分の考えや表現に生かす言語活動を取り入れるということです。教科書では、子どもたちの発達段階や学習の習熟度などを考慮し、そうし

た言語活動を系統的に位置づけています。例えば、四年上「だれもが関わり合えるように」(「話すこと・聞くこと」)。この単元では、「調査の報告をしたり、それらを聞いて意見を述べたりする」という言語活動が設定されています。子どもたちは、自分の関心に沿った課題について調べ、分かったことや気づいたことを発表します。ここで彼らは、集めてきたさまざまな情報を分類・整理することで自分の考えを見いだしたり、自分の課題に照らして重要な情報を選び取ったりするを経験することになります。

いっぽう、六年「ようこそ、私たちの町へ」(「書くこと」)で言語活動として位置づけられているのは、「町のよさを多くの人に伝えるための文章を書き、編集する」ことです。相手や目的に応じて、文字だけではなく、写真や絵・図なども使って、みんなで吟味しながら効果的に伝えることを経験します。ここでは、文字・写真・絵・図それぞれの特性について、これまで学んでき

たことが役立ちます。このことは、特性を踏まえ、たうで情報を理解し、表現に生かすことにつながっていくでしょう。

このような言語活動を自ら経験することを通して、子どもたちが情報の理解・表現について学んでいけるように教科書は構成されているのです（下表参照）。こうした言語活動を展開する際には、活動の手順をただ追うのではなく、「実生活の中で使えるように」という視点をもつことが、子どもたちの学びをより深く導くことになると思います。

知識の整理・活用

ある言語活動を通して経験的に知ったことを、他の学習場面や生活で使いこなすには、それを知識として理解したり、一般化したたりする必要があります。教科書では、三年以上の各学年で、単元末に適宜、「情報コラム」という系列が新設されました。ここでは、知識を整理したり、単元で扱いきれない新しい視点を示したりしています。情報コラムには、情報を読み解いたり、自分の表現に効果的に活用したりするときの要点が整理され、学習場面に即して示されています。例えば、三年下「すがたを

える大豆」は、言葉だけでは分かりにくい

部分に写真が添えられた説明文です。読み進めるにあたっては、文章と写真を合わせて読んでいくことになります。この教材の後に置かれた情報コラム「絵や写真を使ってせつめいする」では、絵・写真を使って説明する意味やよさが解説されています。

ここでしっかりと確認した知識は、この後に続く教材「食べ物のひみつを教えます」で、説明の文章を書くときにも生かすことができます。もちろん、関連のある教材は他にもさまざまあるので、機を捉えて立ち戻るといった使い方もできるでしょう。

実は、教科書に掲載されている他にも、押さえておきたい細かな知識はたくさんあります。それらについては、学習指導書『情報・メディアに着目した授業をつくる』に、教師向けのコラムとして収録されています。こちらにも必要に応じて活用することができそうです。

「実生活の中で使えるように」という視点をもって。



なかがわ いちろ
中川一史
北海道生まれ。横浜市内の公立小学校教諭、横浜市教育委員会、金沢大学助教授、メディア開発センター教授を経て、2009年より放送大学教授。主な研究テーマは、国語科における映像メディアの理解と表現、デジタル教科書の活用など。著書に、『タブレット端末で実現する協働的な学び』（共著／フォーラム・A）など多数。光村図書 小学校「国語」教科書編集委員。

「読むこと」を通つて

「読むこと」の中でも、特に説明文の学習は、①・②を学ぶのにより機会であるといえます。教科書には、先ほど挙げた「すがたをかける大豆」のように、文章と、文章以外の情報（写真や絵・図など）を合わせて読む説明文が、適宜配置されています。それに加えて、テーマ・題材そのものを

①・②と関連させた説明文が位置づけられていることも、注目すべき点です。例えば、四年下「アップとルーズで伝える」では、テレビの映像技法について取り上げ、情報が取捨選択されて伝えられていることが説明されています。それから、五年「想像力のスイッチを入れよう」では、メディアからの情報を正確に受け止めるために必要な努力についての筆者の考えが、事例とともに述べられています。

いずれも、情報の理解と表現のしかたに関する自覚を促し、メディア・リテラシーを学ぶ導入ともなる内容といえるでしょう。これらの単元では、文章や筆者の意図を正確に読み取ることに加え、ぜひ、説明されている題材・テーマにも立ち止まり、子どもたちと確認したり考えたりしてみることがお勧めします。

ご紹介してきたように、教科書には、情報やメディアの特性を踏まえた理解・表現、メディア・リテラシーを意識した学習の場が、学習の必然性に即して随所に位置づけられています。指導の際には、こうした観点も意識し、子どもたちに主体的・協働的に情報を扱う力がつくような授業展開や手立てなどを検討していただけたらと思います。（談）

▼情報の理解と表現に関わる学習活動の段階表（○は学習活動、■は教材名）

情報の理解	情報の表現
○絵や写真と文章を対応させて読む ○順序に気をつけて読む ○知っていることとつなげて読む など	○話す順序や事柄に合わせ、実物や絵、写真を指し示しながら話す ○絵を描いて報告・説明する文章を書く ○写真や絵を用いて、記録する文章を書く など
1・2年 ■1年 上巻「くちばし」「うみの かくれんぼ」／下巻「じどう車くらべ」 など ■2年 上巻「たんぼぼの ちえ」／下巻「しかけカードの作り方」 など	■1年 上巻「おおきく なった」「なつやすみの ことを はなそう」／下巻「しらせたいな、見せたいな」「いい こと いっぱい、一年生」 など ■2年 上巻「かんざつ名人に なろう」／下巻「お話のさくしゃになろう」「おもちゃの作り方」「あったらいいな、こんなもの」 など
○絵や写真、図表と文章の組み合わせの効果について理解する ○まとまりを捉えて読む ○文章の組み立てに注意して読む など	○内容に合わせて、実物・絵・写真・図表などの資料を使って理由を挙げて説明する ○テーマに合った写真や図表を選択し、報告・説明する文章を書く など
3・4年 ■3年 上巻「気になる記号」／下巻「すがたをかける大豆」「しりょうから分かる、小学生のこと」 など ■4年 下巻「アップとルーズで伝える」「ウナギのなぞを追って」 など	■3年 上巻「気になる記号」／下巻「食べ物のひみつを教えます」「しりょうから分かる、小学生のこと」 など ■4年 上巻「新聞を作ろう」「だれもが関わり合えるように」／下巻「クラブ活動リーフレットを作ろう」 など
○情報の送り手の意図を吟味する ○絵などと文章の補完の効果を理解する ○筆者の考えの根拠となる事例、各段落の役割について考える など	○図やグラフを示しながら根拠を挙げて説得する ○さまざまな資料から、テーマに合ったグラフや表を引用して、報告・説明する文章を書く など
5・6年 ■5年 「新聞を読もう」「天気を予想する」「想像力のスイッチを入れよう」 など ■6年 「時計の時間と心の時間」「鳥獣戯画」を読む「この絵、私はこう見る」 など	■5年 「グラフや表を用いて書こう」「すいせんします」 など ■6年 「ようこそ、私たちの町へ」「今、私は、ぼくは」 など